

ヘンリー・ジェームズの小説観についての一考察：
『黄金の杯』を手がかりに

田辺千景

ヘンリー・ジェームズ最晩年の作品、『黄金の杯』は非常に長い小説であるが、事件らしい事件は少ない。二組の結婚と一つの姦通という事件しかないこの小説が、こんなにも長くなってしまう原因は、今日までこの作品が様々な批評の場に引き出されている原因と一致するかもしれない。それはすなわちヘンリー・ジェームズ特有の曖昧な描写、どうとでもとれるような表現が、語句のレベルのみならず、出来事や、登場人物の感情など、小説を構成する全ての要素に用いられているからであり、そのため描写は長くなり、また読み手も幾通りもの解釈を描きつつ小説を読み進めることになる。この作品についての数え切れない多くの先行研究を振り返ってみても、後期の特徴的複雑な文体を論じた研究や、マギーという主人公のアクションに注目してヘンリー・ジェームズの女性像やモラルティーをはかる試金石として論じた研究や、アメリカ人、大富豪、アダムという象徴的な名前、に注目して、ヘンリー・ジェームズの「帝国主義」を研究している批評もある。あるいは、父-娘という「母」の欠落に注目して、精神分析あるいはジェンダーの見地からこの小説を論じる批評もある。またタイトル『黄金の杯』にも端的に現れているように、「金」についての描写が多いこの作品を消費経済とからめて論じた研究などは近年特に興味深い批評が展開されている。このようにこの作品からは汲めども尽きぬ泉のように、あとからあとから疑問や謎が湧いてくるのである。

しかしながら、もちろん、曖昧さや複雑さは、ジェームズの場合この作品固有の問題ではない。それら、すなわち曖昧さや複雑さがもたらすもの、について考えるにあたり、実はこの作品こそが重要であると考えられるのである。その理由はヘンリー・ジェームズ自身がこの作品を「再読」して、そこから得た印象を書くことから始まるこの作品の「前書き」に見いだせる。

Among many matters thrown into relief by a refreshed acquaintance with *The Golden Bowl* what perhaps most stands out for me is the still marked inveteracy of a certain indirect and oblique view of my presented action; unless indeed I make up my mind to call this mode of treatment, on the contrary, any superficial appearance notwithstanding, the very straightest and closest possible. . . through the opportunity and the sensibility of some more or less detached, some not strictly involved, though thoroughly

interested and intelligent, witness or reporter, some person who contributes to the case mainly a certain amount of criticism and interpretation of it.¹

ヘンリー・ジェイムズ自身が『黄金の杯』を読み直して確認したのは、この作品に「或間接的な遠回しの見方が相変わらず根強いということ」だと書かれているが、この間接的な遠回しの見方はまた「このうえなく密着した直接的な方法」とも表現されることになる。「どの程度か事件から離れていて、厳密にそれに巻き込まれないある人、それでいて強い感心を持ち、理解力も備え、事件に対して或程度の批評と解釈を与えるような証人あるいは報告者」が描く小説であるため、私達は「鏡に映った像をみるような」状態になり、果たして実像と虚像の区別がつかなくなり困惑するのである。このような手法はこの作品に限った問題ではないが、ヘンリー・ジェイムズはこの作品の再読を通じて、この方法が「小説制作上の貢献・・・すなわち多様性への訴え、量り知れなさに対する訴え」の点で有益であったと断言するのである。² そこで本論では、一見他の作品と同じように思われる「曖昧」や「間接性」にまつわる問題が、この作品では特に何か小説の「多様性」や「量り知れないこと」につながるのだということ、確認していくことになるだろう。

この作品のもうひとつの問題は「無知」あるいは「無垢」から「知」に至る主人公の描かれ方にある。このパターン、すなわち主人公が無知から知に目覚める過程は、ヘンリー・ジェイムズの得意とするところであり、いわゆる後期三部作のストレーザーやミリー、また『ある夫人の肖像』のイザベルや「密林の野獣」のマーチャーなど、枚挙に暇がない。しかし、『黄金の杯』とは異なり、これらの作品では主人公が「知」に目覚めたのち、アクションをおこさない。彼らは「知」に目覚めたまま運命を受け入れ、小説が終わってしまう。その結果ミリーのように間接的に影響を与えることはあっても、ヘンリー・ジェイムズ作品では、無知から知に至ることは、主人公の内面の変化を生じはするが、主人公の外的変化には結びつかないこと（あるいはその段階で小説が終わってしまうこと）が多い。ところがこの『黄金の杯』は、マギーが知に目覚めたのち、何をどうしたかが（正確には何をどうしなかったか、になるのだが）小説の重要なテーマになっている。ここにヘンリー・ジェイムズ作品の中における『黄金の杯』の固有の価値を見だし、本論はまずここを手がかりにこの小説を読み直してみてもどうかと考えた。

1 マギーのしたこと

それでは、姦通を推察し、無知から知に目覚めたマギーがしたことから確認していきたい。Book 2 に入り、疑うことを初めて知った（つまり知に目覚めかけた）マギーがまず始めたことは、「配置」arrangementである。姦通を認知してはいないが不安という形で感知しているマギーは、まさに姦通を終えて帰ってくる夫を待ちながら何をしたらいいのかわからない。しかし彼女が選んだのは自分の場所を決めることで、アメリーゴの場所を決めることであった。

For it had been a step, distinctly, on Maggie's part, her deciding to do something just then and there[Portland Place] which would strike Amerigo as unusual, and this even though her departure from custom had merely consisted in her so arranging that he wouldn't find her, as he would definitely expect to do, in Eaton Square. (II, 9)³

イトンスクエアに留まらないで、馬車に乗ってポートランドプレイスに帰ることにより、アメリーゴの帰る場所を決定する、という物理的な「配置」がやがて人間関係を変えていくことになる。この後もマギーは積極的に配置をする。それまで興味を示さなかったパーティーを自ら計画しポートランドプレイスに全員（姦通の原因を引き起こしたキャステルディーン夫人までも）呼び集めたり、自らはシャーロットとロンドンに留まって、アダムとアメリーゴをヨーロッパ旅行に行かせようとしたり、ロンドンを離れて別荘で暮らすことを提案したり、アメリーゴとシャーロットの密通の鍵となる「黄金の杯」を見せるためにアシンガム夫人を自室に呼びつけたり、最終的にはアダム、シャーロットはアメリカに、自分達はイギリスに配置することになる。マギー自身、自らの「配置」とその力を認めている。

'I[Maggie] 'm by a miracle of arrangement not at luncheon with father at home. I live in the midst of miracles of arrangement, half of which I admit are my own.' (II, 110)

このような物理的な配置と人間関係の配置の対応は、この小説の始めから一貫している問題であった。そもそもarranged marriageであったことが強調されるマギーとアメリーゴの結婚から始まるこの小説は、この一つのarrangementによって今までの人間関係に変化がうまれる。そこでアダムとシャーロットの arranged marriage が計画され、このarrangementはまた新たな人間関係をつくることになるのである。

さて、小説後半、一手にarrangementを引き受けたマギーは、何をしたかったのか。そもそもarrangement「配置」という単語が「形をつくること」とは切り放せない関係にあるように、彼女がやりたかったことは liberal form を作ること、と表されている。

[B]ut they liked to think they had given their life this unusual extension and this liberal form, which many families, many couples, and still more many pairs of couples wouldn't have found workable. (GB II, 5-6)

一体 liberal form とは何だったのかは後述するとして、配置以外に彼女がその実現の為にに行ったことは「いわないこと」や「隠すこと（嘘）」や「回避すること」であった。例えば彼女は徹底的に「姦通」という言葉を口に出さないし、それを知っ

ていることさえも隠そうとする。シャーロットから責められても「逃げたり」「だまったり」することで、結局彼女に全てを決定させたことにして、自分の意志を実現することになる。これらの行為は一義的には「曖昧」を生じさせるものと考えられる。言わなかったり、隠したりすることで、「事実」というものを曖昧にしてしまうことになるのだが、それはまた「事実」というものを唯一の存在にしない方法であることとも考えられる。嘘を例にとれば、言ってしまうことで事象が一つになってしまうことを避け、事象に一对一の対応ではなく、一对二以上（一对多）の関係を生じさせる機能があると考えられるのだ。

ここで私達は、彼女が liberal form 完成の為にとった手段が、ヘンリー・ジェイムズがこの作品を描くためにとった手段と一致していることに気づくのである。

2 ヘンリー・ジェイムズのしたこと

肝心なことから手がかりは登場人物間の対話によって得られるこの小説は、奥歯にももののはさまったような登場人物同士のつかみどころのない会話を丹念に追っていかねばならないのだが、さらに頻出する everything という言葉によって、その作業は困難を極めることになる。Everythingによって、文法的には完全でも意味の上では不完全な文章ができてしまうことがわかる。多くの批評家たちはすでにこれらが何を表すのか「解釈」してきた。例えばアメリゴとシャーロットが姦通を犯す直前の台詞を例にとってみよう。

‘These days, yesterday, last night, this morning, I’ve wanted everything.’

‘You shall have everything.’ (GB I, 363)

この場面における everything は all of you/me と置き換えるのが妥当であろう。しかし、ここで問題にしたいのは、あえて all of you/me とは言わないで（ヘンリー・ジェイムズが書かないで）、意味を曖昧にとどめておくという行為である。すると everything の共通の機能としてあげられるのは、それらが何らかの具体的な表現の代わりとして用いられているということである。しかし everything という言葉の性質上、何らかの事象や意味に置き換えることは不可能であり、文章それ自体の意味は曖昧になる。Everything は nothing と同じことになってしまうのである。マギーとアシンガム夫人の以下の会話は、everything と nothing が同じ機能を持つことを端的に表現している。

‘Then nothing, that evening of the Embassy dinner, passed between you[Maggie and Amerigo]?’

‘On the contrary everything passed.’

‘Everything—’

‘Everything.’ (GB II, 215)

頻出するeverythingとnothingという二つの言葉に共通する機能は「隠ぺい」すること、そしてそれによって事象に一对多対応を生じさせることである。つまり何か具体的な物を指すことを回避して、「全て」とか「何でもない」といってしまうことで、事象をそれ自体として成立させることを回避するのである。さらにつけ加えるならsomethingという言葉もこの小説中同じように肝心の所に現れている。ヘンリー・ジェームズは何か具体的なことをさすことを回避してsomethingを用いているのである。通常somethingは何か感知できるけれども、名状しがたい事物を表す場合に用いられるのだが、姦通を知ったマギーは、あえて‘Something very strange has happened.’ (GB II, 154) とアシンガム夫人に語り、「姦通」という言葉を口に出さないことを選ぶ。つまりわざと具体的な事象（事実）を回避し、somethingということでの事実を隠ぺいするのである。このようなこの「隠ぺい」が文章を、そして小説全体を曖昧にすることは、明かだが、それはまたeverything/somethingが、解釈の多様性、すなわち一对多対応の世界を生じさせる原因にもなっていることを表している。なぜならeverything/somethingという表現が出てくる度に、我々は小説で語られていることと、そこでは語られていないけれど存在していること、を同時に意識することになるからである。

このような「言わない」ことによって、「いわないけれど存在している世界」を意識させる手法は、批評家によって既に指摘されているヘンリー・ジェームズの特徴的文体「否定文」あるいは「準否定文」をも説明すると思われる。⁴ 例えば「男」と言わず、「女ではない」ということで、対応する選択肢を残す、ないしは「女」というものを引き合いに出すことで「そうではない」世界を意識させるという手法をとるのである。これもまた一对多対応を補強する。そして「—ではない」と「—」というものを引き合いに出して論じるヘンリー・ジェームズの否定は彼の「比較」にもつながるのである。

この小説で繰り返し用いられる表現方法に「比較」がある。小説冒頭アメリカゴは、以下のように描写される。

[H]e was one of the Modern Romans who find by the Thames a more convincing image of the truth of the ancient state than any they have left by the Tiber. . . he recognized in the present London much more than in contemporary Rome the real dimensions of such a case. (GB I, 3)

このほかにも比較級を用いた比較表現は頻出するのだが、さらに具体的に比較の対象は書かないけれど、何かと比べていると思われる表現方法がある。それは、comparatively, oddly, strangely, measurably, perverselyといった語の頻繁な使用である。これらは、語り手が描写するときに用いる言葉だが、本来は何か比べる対象があって初めて存在し得る単語なので、この単語が含まれる文章は、具体的に何と比べて

いるかはわからないままであっても、語り手が小説の場とは異なる世界の物差しを用いて、「何か語り手の頭の中に描いている世界」と比較して、「小説内事件」を語っていると思われる。つまり比較はマギー達の物語がマギー達の世界の中だけでとどまることなく、それとは別の世界と相対化されて語られていることを示唆する。するとマギー達の世界と、それとは異なる語り手の世界という二つの世界がこの小説に内在していることが確認できるのである。ここでもまたヘンリー・ジェームズが一つの小説に二つの世界を対応させていることがわかる。

さらに、everything/somethingや比較を合わせたような表現として、ヘンリー・ジェームズお得意の比喩に注目しなければならないだろう。As ifの多用はいつも取り上げられる問題であるが、一つの事物や一人の人間に全く別の物を対応させて描くヘンリー・ジェームズの文体は、一対多の世界を作る一端を担っている。

こうして見てみるマギーが彼女の世界を造るために用いた方法は、ヘンリー・ジェームズが小説を描くために用いた方法と同じ結果をもたらすことになる。

3 マギーとヘンリー・ジェームズがしたこと

=リベラル・フォーム

マギーがやろうとしたことは、リベラルフォームを完成させることであると描かれていることは既に述べた。結局彼女は自分の「やりたいようにやった」と描かれているのだから、父親とシャーロットを、シャーロットの「意志」でアメリカに渡らせ、自らはアメリーゴと家族を作ることとなるこの小説のエンディングは彼女のliberal formの完成を意味するだろう。

And the truth of it had with this force after a moment so strangely lighted his eyes that as for pity and dread of them she buried her own in his breast. (GB II,370)

小説終わりの場面で見通りアメリーゴの胸に抱かれた彼女が、「僕は君以外何も見えないよ」という彼の言葉を聞いて、彼女は「哀れ」でもあり「恐ろしく」もあって、自分の目を彼の胸に埋めることになる。この「哀れ」でもあり「恐ろしく」もあるという殆ど矛盾相対するものが同時に存在するマギーの心情は、彼女が目指していたliberal formそのものの性質によって避け難く決定されたと考えられる。そもそもliberal formとはそれ自体非常に矛盾をはらんだ言葉である。リベラルであれば、フォームは形成できないだろうし、フォームを作るためにはリベラルでは有り得ないであろう。

マギーらにとってform「形式」とは、繰り返し小説中で用いられる言葉、line, ruleに隠されている「世間」や「社会」の制約を意味する。⁵ その形式を守りつつ、さきほどのべたようなやり方でマギーは「選択肢」を作る努力をする。それは周りの人間が「選択肢」から選び取る自由を享受するためである。彼女の隠ぺいや回避も「選択肢」（それは一対多の関係を生じさせる、ということと同義なのだが）を生

み出す為の努力であり、その結果彼女の周囲の人間に「自由」を与えようとするわけである。

だが、それはあくまでも制約という枠組みの中での「自由」であり、所詮幻影に過ぎないという気さえする。この疑問の解答を『使者たち』のストレイザーのあの有名な台詞に見出せはしないだろうか。

‘The affair—I mean the affair of life—couldn’t, no doubt, have been different for me; for it’s at the best a tin mould, either fluted and embossed, with ornamental excrescences, or else smooth and dreadfully plain, into which, a helpless jelly, one’s consciousness is poured—so that one ‘takes’ the form, as the great cook says, and is more or less compactly held by it: one lives in fine as one can. Still, one has the illusion of freedom; therefore, don’t be, like me, without the memory of that illusion. . . Live!’⁶

ストレイザーは、人生を「ブリキの鑄型」になぞらえそこに人間の意識という「ゼリー」が流し込まれると表現し、型があるから人生は所詮分相応と決まっているけれども、自由であるという「幻影」を持たなくてはいけない、それこそが生きることだと訴えている。ここでストレイザーの台詞として用いられている言葉は『黄金の杯』でも共通である。⁷つまり幻影を作ることそれ自体が自由を生じさせ、その自由を味わうことこそが生きることである、というストレイザーの主張は、そのままマギーがこの作品で実践したことだと考えられるわけである。

マギーの世界を造っているこの「自由」と「形式」というタームは、実は「小説の唯一の存在理由は人生の再現にある」と生きることと小説創作を一連に捉えていたヘンリー・ジェームズが、小説作法について論じるときに頻繁に用いている表現である。そしてヘンリー・ジェームズもまた、マギーと同様、この二つの相対する世界の矛盾を乗り越えようとしたと思われる。

マギーが常に「社会」の目といった制約（という形式）を引き受けながら、自由と生きることを実践しようとしていることは既に確認したが、一方ジェームズにとっても、「形式」とは小説から切り放せないものだと考えていることもわかる。

The story and the novel, the idea and the form are the needle and thread, and I never heard of a guild of tailors who recommended the use of the thread without the needle, or the needle without the thread.⁸

それでは、最も自由であることと、整った形式を持つことは、矛盾しないのだろうか。つまり、美しい形式、たとえば韻律を持った詩は必然的に限られた言語の中から詩を生み出すことを余儀なくされるであろう。同様に、ヘンリー・ジェームズが形式にこだわれば、彼の書くことに制限はうまれないのだろうか。例えば、この小説は非常に整った形式を持っている。ほぼ同じ質量をもつプリンスとプリンセス

という一対の2部から構成され、しかもそれぞれのパートはこれまた同じ様な長さの3章に別れている。この形式を守るためにヘンリー・ジェームズはある自由を制限されたと考える方が妥当である。しかし彼は「自由」な「形式」を主張する。それは一体何なのか。

そこでヘンリー・ジェームズの小説論から「自由」について論じている部分を考察してみよう。

It appears to me that no one can never have made a seriously artistic attempt without becoming conscious of an immense increase—a kind of revelation—of freedom. One perceives in that case. . . that the province of art is all life, all feeling, all observation, all vision. . . all experience.⁹

I should remind him[the young novelist] first of the magnificence of the form[the novel] that is open to him, which offers to sight so few restrictions and such innumerable opportunities. The other arts, in comparison, appear confined and hampered.¹⁰

This freedom[of fiction] is a splendid privilege. . . All life belongs to you[young novelists].¹¹

こうしてみるとヘンリー・ジェームズは小説ほど「自由」な芸術は無いと考えていることがわかる。ヘンリー・ジェームズによれば「自由」とは「制限がなくて数え切れない選択肢があること」となる。さらに「制限がなくて数え切れない選択肢がある自由」と「想像力」そしてそこから生じる「小説・芸術」はヘンリー・ジェームズの中で一連のものであることもわかる。さらにそれは「生きること」とも同義として語られている。

この論を補強する例として、ヘンリー・ジェームズお得意の芸術家を主人公にした作品の一節をひいてみたい。‘The Real Thing’「ほんもの」というタイトルを持つこの短編は、「真実」すなわち「現象の一元化」の不確かさを描いた作品である。この作品では、中心人物である画家が、モデルを選ぶにあたり、貴婦人を描くには貴婦人ではなく、はすっぱな町娘のほうがよいことに気づく、ということが話しの大筋になっているのだが、ここでは「選択」がなくて「同一」であることは、芸術を生み出せなくなることが、はっきりと描かれている。

Combined with this was another perversity—an innate preference for the represented subject over the real one. I liked things that appeared; then one was sure. Whether they were [real] or not was a subordinate and almost always a profitless question.(317-8)¹²

Her figure had no variety of expression—she herself had no sense of variety. You may say that this was my business, was only a question of placing her. I placed her in every conceivable position, but she managed to obliterate their difference. She was always a lady certainly, and into the bargain was always the same lady. She was the real thing, but always the same thing. (326)

本論ではすでに、この作品の「前書き」でヘンリー・ジェームズが自分の取った手法（形式）を評して、「多様性」や「量り知れなさ」を生じさせるに至ったと述べていることに注目した。つまり、この作品はヘンリー・ジェームズにとつてようやく「自由」な「形式」が両立したと考えられないか。

それでもまだ、「多様性」や「量り知れなさ」といった、本論では一対多対応と呼んでいる現象が、何をもたらすのか明白ではない。その手がかりとして、再び「ほんもの」を引用してみよう。

When it came over me, the latent eloquence of what they[a noble couple] were doing, I confess that my drawing was blurred for a moment—the picture swam. . . They had bowed their heads in bewilderment to the perverse and cruel law in virtue of which the real thing could be so much less precious than the unreal. . . If my servants were my models, my models might be my servants. They would reverse the parts. (345)

この作品は最終的に貴婦人がお茶汲みをし、本来は召使いである町娘が貴婦人として画家の前に座ることになる。本物は偽物であり、偽物は本物である、という逆転が一対多対応から生じていることは、ヘンリー・ジェームズにおける「自由」と芸術を考える上で大切な問題であろう。実際、『黄金の杯』でもマギーが一対多対応の世界を造ることによって、<本物>と<偽物>の逆転は起こりうるのだ。例えば以下の3つの台詞は誰が誰にいったものだろうか。

‘Let me admit it—I am selfish. I place my husband first.’ (GB II, 317)

‘How I see that you loathed our marriage!’ (GB II, 317)

‘You recognise then that you’ve failed?’ (GB II, 317)

一見すれば、これらのセリフはマギーがシャーロットにいったものであると思われる、しかし実際は、小説終わり間近にシャーロットがマギーに言い放つセリフである。つまり、この作品内に、すでにシャーロットの語る形式上の表の世界と、マギーの裏の世界が同時に存在し、しかもその価値は逆転していることが確認できるわけである。こうして考えると、一対多対応の世界は、虚構と真実との区別を曖昧

にする世界でもある。それこそが、ヘンリー・ジェームズの小説の目指すところであったと考えられる。

4 「自由な形式」と「生きること」

ヘンリー・ジェームズが小説が「自由」である、といったのは書き手として小説は何でも描けることを指していると同時に、読み手として小説から享受する「想像力」や解釈の多様性を指すとも考えられる。

Could I but make my medal hang free, its obverse and its reverse, its face spectator.¹³

The house of fiction has in short not one window, but a million—a number of possible windows not to be reckoned, rather; every one of which has been pierced, or is still pierceable, in its vast front, by the need of the individual vision and by the pressure of the individual will.¹⁴

つまり、ヘンリー・ジェームズの目指したものは、読者によってコインの表裏のように全く違った面が一つの小説に内在することだと考えられるわけである。マギーの目指した liberal form 同様、彼の目指した小説世界も本質的に相対的なものが同時に存在することになる。そう考えるなら、彼が成し遂げようとしたことはこの小説で見事に完成しているとはいえないか。形式的にはアメリーゴの視点から描かれた BOOK 1/Prince と、マギーの視点から描かれた BOOK 2/Princess という相対する世界を一つの小説世界とし、そこから生まれたこの芸術作品は今日まで相対する解釈を常に我々に要求するのだから。ついにヘンリー・ジェームズは自らの創作の目指すものをマギーの生きる姿で表現し、完成させたのだから。そしてさらに彼の小説を読む者もまた、「想像力という自由」＝「生きること」を味わうことになるのだから。

本論の結びとして、この小説のタイトルでもあり、小説内でも重要な役割を果たす the golden bowl 「黄金の杯」に触れておきたいとおもう。このタイトルが「伝道の書」の有名な一節から取られたのではないかということは、既に指摘されているが、もう一度「伝道の書」を読み直してみると、驚くほど本論が扱ってきたヘンリー・ジェームズの小説にまつわる問題と一致するのである。この「伝道の書」は、伝道者すなわち「知を伝えるもの」の言葉からなっているのが特徴であり、「知を得ることと、それによる混乱や苦しみが主として描かれている。そして「あなたの若い日にあなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり、年がよって私には何の楽しみもないというようにならない前に・・・その日になると、金の皿は砕け」てしまうから、と「金の皿」the golden bowl イコール生きることと知ることの比喩として語られている。

この小説に現れる「黄金の杯」は、表面が金で、キズひとつないピカピカ光る黄金の杯が、実はキズの入った水晶の杯である。この象徴的な設定は、今日までさまざまな批評の格好の材料となってきた。あえて本論に従ってこれを解釈するのなら、真実を嘘で隠ぺいしようとするのが、一対二以上対応をもたらすことになるように、キズつきの水晶と金の杯は一対二以上対応の象徴でもある。しかしそれが金の杯のままでは、だれもその対応がわからない（無知の状態）。しかしこの杯が割れた時、初めて一対二以上対応の世界に気づくことになる（知に目覚めた状態）。この小説でマギーが杯が割れる場面を境に「一対二以上対応の世界」を受け、自ら作っていかうとしたという事実を考えれば、この推論は補強されるだろう。

さて、それではどうして杯は「きれいに三つにわかれ、押さえていないとバラバラになってしまう」のか。一対二以上対応の象徴である杯は、すなわちこの小説自体を象徴するものでもある。杯が割れる、すなわち無知から知に目覚めることで、この小説の解釈が生じるが、しかしその多用な解釈はどれもこの一つの小説世界の断片にすぎないこと、そしてその世界はそれらの断片が集まらなければ成立し得ないことを意味しているのではないだろうか。

注

本稿は1995年9月に行われたアメリカ文学会東京支部会における口頭発表に加筆訂正したものである。

¹ James, Henry. *The Art of Fiction*. Veeder, William ed., *The Art of Criticism*. (U of Chicago P, 1986), 376.

² [T]hat most exquisite of all good causes the appeal to variety, the appeal to incalculability, the appeal to a high refinement and a handsome wholeness of effect. (Ibid., 378)

³ James, Henry. *The Golden Bowl*. The New York Edition. 以下作品からの引用は全てこの版による。

⁴ Chatman, Seymour. *The Later Style of Henry James*. (Blackwell, 1972)やTodorov, Tvetan. *The Poetics of Prose*. (Cornell UP, 1977)等で指摘されている。

⁵ 「形式」が「世間」や「社会」の制約であることは、以下のような場面で示唆されている。

‘She [Charlotte] observes the forms,’ said Fanny Assingham.

‘With the Prince—?’

‘For the Prince. And with others. . . And the forms. . . are two third of conducts.’

‘Are the “forms” you speak of. . . what will be keeping her [Charlotte] now. . . from coming home with him [Amerigo] till morning?’

‘Yes—absolutely. Their forms. . . Maggie’s and Mr Verver’s—those they impose on Charlotte and Amerigo.’ (GB I, 391)

‘What if I’ve abandoned them, you know? What if I’ve accepted too passively the funny form of our life?’ (GB II, 25)

‘They had taken too much for granted that their life together required, as people in London said, a special ‘form’—which was very well so long as the form was kept only for the outside world and was made no more of among themselves than the pretty mould of an iced pudding, or something of that sort, into which, to help yourself, you didn’t hesitate to break with the spoon.’ (GB II, 27-28)

‘[T]hey could no longer afford, as it were, he to let his wife, she to let her husband, “run” in such a compact formation.’ (GB II, 6)

⁶ James, Henry. *The Ambassadors*. The New York Edition, 218.

⁷ 注5で引用したように、『黄金の杯』では「プリン」の「型」という表現で、同じことが書かれている。

⁸ Veeder, 60.

⁹ Ibid., 64.

¹⁰ Ibid., 64.

¹¹ Ibid., 64.

¹² James, Henry. ‘The Real Thing’ The New York Edition. 以下作品の引用は全てこの版による。

¹³ James, Henry. *Essays on Literature*. (The Library of America, 1984), 294.

¹⁴ Ibid., 46.